

高木顕明『余が社会主義』を読む

——信仰と社会について——

黒 田 浩 明

はじめに

近年、日本における家制度を基本単位とした伝統的社會共同体は解体されつつあり、特に都市部において個人主義の傾向は顕著である。そうした中、共同体の支えを失い、孤立した個人がそれぞれに生き抜こうとするため、物質的・精神的両面において、より生きづらく、余裕のない生活を送ることを、多くの人が強いられている。

自分自身の生活に追われるということは、戦争や差別といった人間社會における根源的問題、もしくは環境問題や新しい技術がもたらす社会的弊害など様々な問題などは、一般生活者の意識から乖離してしまいがちだということである。しかし、生活者が自分自身と、自分を取り巻く社會との關係性に関心を持たなくなれば、結果として、他人に判断をゆだねることになり、いづれ個人の生活の質も低下せざるを得ないであろう。故に、倫理的な観点のみならず具体的な利害得失の観点からも、何らかの形で我々は社會との関わりを回復する必要があるのである。

ただし、自己と社会との関係性を問う、ということは、社会を対象化して問題視するような、政治思想を語ることは異なるのである。否、異ならなくてはいけない。政治思想が人間そのものに先立てば、好ましからざる状況をもたらすことは、近現代の歴史が語るところだからである。

では、特定の政治思想などによらず、身近な、できることから社会実践を行う、という姿勢はどうであろうか。一見、最も現実的かつ真摯な態度である様に思えるが、このような理解も問題をはらんでいる。それは自らが本来拠るべき立脚地は何処であるか、という主体的な問題を明確にしないままの実践行動は、不徹底にならざるを得ないのみならず、自己省察を欠き、結果として自他共に損なわれるからである。それは、親鸞が「この慈悲始終なし」^①と指摘するとおりである。

したがって、自己と社会との関係性を問うことは、主体性の問題を問うことから離れてあるべきではない、と言えるだろう。信仰者が、自ら奉ずる教えを具現化するためになす行為実践であれば、なおさらである。以上の様な観点を踏まえたとき、真宗においても、社会との関わり、という課題は、いっそう重要になってきていると言える。そのことを考察するにあたり、本論文では、真宗大谷派の僧侶であり、日露戦争に反対の姿勢を示し、大逆事件に連座して投獄された、高木顕明という人物について取り上げたい。高木顕明については、その行実からも大いに学ぶべき点があるが、ここでは、彼の信仰を記したとされる『余が社会主義』という論文を読み解きながら、彼の実践思想と真宗理解を見ていきたい。なぜなら、それが信仰と社会の関わりが如何なるものであるべきか、我々に大きな示唆を与えるものと考えるからである。

親鸞教学のうちに社会との関わりを見ることの困難性

本題に入る前に、高木顕明が拠るところの、浄土真宗という信仰のあり方の持つ特色を踏まえておきたい。

浄土真宗は、その教義としての性格上、自己と社会との関わりを見ることに困難性を抱えている。それは宗祖である親鸞の教えが、行者のはからい¹¹自力をはなれることを説く、本願他力の教えだからである。

親鸞は、自力の善業について『一念多念文意』において、

おほよそ、八萬四千の法門は、みなこれ浄土の方便の善なり。これを要門といふ、これを假門となづけたり。

この要門・假門というは、すなわち『无量壽佛觀經』一部にときたまへる定善・散善これなり。定善は十三觀なり、散善は三福九品の諸善なり。これみな浄土方便の要門なり、これを假門ともいふ。この要門・假門より、もろ／＼の衆生をすゝめこしらえて、本願一乘圓融无導眞實功德大寶海におしへすゝめいれたまふがゆへに、よろずの自力の善業おぼ、方便の門とまふすなり。¹²

というように、本願他力へと導く方便の門と定義している。

それゆえに凡夫である我々の行為実践は、究極的な意味（浄土往生の正因となるか、という意味）では否定されることになる。もちろんこのことは、仏道における実践のあり方について、浄土門との対比から定義するものであり、そのままに社会实践について述べたものではないが、対他的な実践行動について否定的な印象を与えるもので

あることは間違いない。

こうしたことから、歴史的に見ても、また現在の状況を鑑みても、浄土真宗の立場においては、他宗派と比較して、社会運動などに否定的な姿勢が多く見られる。ならば、自己と社会との関係性を問い、やがて社会実践へとつながっていく原理を、教学上、どこにおいて確認することが出来るだろうか。

そこで従来、親鸞の教学面から、社会との関わりを論ずるにあたっては、二種回向論（における還相回向）や真俗二諦論（王法・仏法の問題）等の視点から検討されている。しかし、それらの了解は教学的に（特に大谷派においては）多種多様な論議がなされ、統一された見解がないのが実情である。それは、いかに客観的に検討しようと努めても、つまるところ、問題を取り扱うものの課題意識や「実践観」が影響してしまうからである。したがって、推究の際、何らかの課題意識、例えば「真宗における社会的実践の論理の構築」といった目的意識を過度に先行させてはならない。なぜならこのような姿勢はやがて自己の価値観に適うべく親鸞を読み解こうとする恣意的態度に陥り、畢竟自己の立場を「親鸞」の名によって補強していくにすぎなくなるからである。³⁾

という指摘には大いに注意を払うべきであろう。自説の客観性を担保するためには、教学面からは、該当箇所の検討のみでなく親鸞思想全体の体系的な読み解きが必要になるであろうし、親鸞の行実や、時代社会環境の考証を傍証として検討することも重要である。しかしそれによっても、反証はいくらでも可能であって、客観学問によって親鸞の「実践観」がどのようなものであったのか、ということを確認することはほぼ不可能ともいえる。

ただし、特定の哲学や社会思想の立場を、そのまま親鸞の立場であるとするような先入観であってはならないが、

「実践観」とは各人の主体性そのものと不可分のものである以上、我々は単に親鸞の教えを思想的に分析することに留まるべきではないであろう。親鸞の信仰に学ぶ上では、様々な課題性を持った自分という存在、その主体性をもった学びこそ必要ではなからうか。

では、主体的な学びを独善的なものにしてしまわないために、どうすればよいのか。その一つの方途として、先人がどのように親鸞の実践思想を了解していったのか、ということに尋ねていくことがあるだろう。そのことを考える上で、本論では、高木顕明の著作である『余が社会主義』を採り上げてみたいと思うのである。

高木顕明と『余が社会主義』

高木顕明（一八六四～一九一四）は、真宗大谷派の僧侶であり、一九一〇年（明治四三年）、幸徳秋水の談話会を自坊で開催したことから幸徳事件（大逆事件）の関与を疑われ逮捕されたことで知られる人物である。尾張国西春日井郡下小田井村（現・愛知県清須市）に生まれ、和歌山県新宮市浄泉寺の第十二代住職となる。旧姓は山田、幼名は妻二郎という。日露戦争に際して非戦論を唱えたほか、公娼制度や部落差別に反対の運動を通して、次第に社会主義に接近していったとされている。

大逆事件とは、旧刑法第七十三条における大逆罪に関わる事件の総称であり、ここでいうのは一般に、「明科事件」、「幸徳事件」等といわれる一件である。真宗大谷派主催のパネル展「高木顕明師の名誉回復に向けて」によれ

ば、

「大逆事件」とは、一九一〇（明治四三）年五月、信州の社会主義者宮下太吉ら四名が、「爆発物取締罰則違反」で逮捕されたいわゆる「明科事件」に起こった、政府による、社会主義者、無政府主義者に対する、一大弾圧事件であります。

この「明科事件」の逮捕者が社会主義者の中心人物である幸徳秋水と強いつながりを持った者であったことから、時の政府は、この事件を利用し、天皇暗殺の「一大陰謀事件」を捏造し、幸徳をはじめとする全国の社会主義者を一網打尽に抹殺しようと企んだのであります。その結果が、二六名が逮捕され、二四名に死刑判決が下されるという、「大逆事件」となったのであります。⁽⁴⁾

とあり、天皇爆殺未遂事件を口実に推し進められた、一大思想弾圧事件であったというのが事実であろう。高木顕明も、社会主義者らとの接近を危険視されたことにより、この一件に連座することになったようである。当初、死刑判決に処されたが、後に無期懲役に減刑された。

ところで真宗大谷派では、高木顕明が大逆事件への関与の容疑で逮捕されたことを受けて、彼に対し擯斥（宗門内で最も重い処分である僧籍の削除）の処分を下した。この時の処分は本人のみならず家族にも及び、一家が寺から退去させられる重いものであったという。このことを受けてか、高木顕明は一九一四年、秋田刑務所で服役中に自殺した。真宗大谷派において、彼の僧籍復帰の名誉回復がなされたのは、死後八五年を経た一九九六年（平成八年）のことである。

では、実際のところ事件前後の彼の思想とはどのようなものであったのか。そのことを窺いうる資料として知られるのが、『余が社会主義』と題された論考である。この『余が社会主義』は、日露戦争の最中、明治三七年（一九〇四年）一〇月四日に完成した原稿であるが、顕明が存命中に公開されることはなかった。したがって現存するのは、大逆事件をうけて一九一〇年（明治四三）年六月三日に家宅搜索にて押収されたものである。それも、原本は現存しておらず、大審院書記が作成した写しのみが残っている。

この論考の製作の意図は、「はじめに」とある箇所に、

余が社会主義とはカールマルクスの社会主義を稟けたのでない。又トルストイの非戦論に服従したのでもない。片山君や古川君や秋水君の様に科学的に解釈を与へて天下に鼓吹すると云ふ見識もない。けれども余は余丈の信仰が有りて、実践して行く考へであるから夫れを書いて見たのである。何れ読者諸君の反対もあり御笑ひを受ける事である。しかし之は余の大イニ決心のある所である。

と明らかにされており、自らの信仰を實踐していく、その決心を表明したものであるという。つまりは、彼の信仰的実践思想がどのような内容を持つものであるかを開陳するものであったと言えるだろう。

大東仁は、「読者諸君……」とあることや、当時の法主の名を伏せていること、等から『余が社会主義』が公開を企図したものであることが考えられ、同時期の『平民新聞』の内村鑑三やトルストイに関する記事との関連性が窺われること、等と併せてこの著作が『平民新聞』への公開を目的として記された⁽⁵⁾と推定しているが、おそらくその通りであろう。

トルストイや片山潜らの説とは、当時の『平民新聞』で取り沙汰された日露戦争に対する非戦論を受けたものと見られる。トルストイが一九〇四年六月二七日の『ロンドン・タイムズ』に寄稿した非戦論である、「爾曹悔改めよ」は、一九〇四年八月七日の『平民新聞』に「トルストイ翁の日露戦争論」として全文訳載され、そのロシア人の立場からの希有な非戦の主張は、日本国内でも大きな反響を呼んだとされる。またそれを受けて、『平民新聞』は次号の社説に、信仰を立場とするトルストイの個人主義的非戦論に対して、運動の思想としての社会主義的立場からの非戦論を展開したのである。こうしたことを承けて、両者のいずれとも異なる立場を明らかにしよう、というのが高木顕明の展望であったとみられる。

ところで、一般に社会主義とは、「生産手段の社会的所有を土台とする社会体制、およびその実現を目指す思想・運動」などと定義されるが、元来、自由主義経済や資本主義の弊害を是正すべく生まれた思想・運動である。それ故に、一口に社会主義と言っても、その範囲は共産主義から社会民主主義、無政府主義、国家社会主義まで幅広い意味を持っている。ただし資本主義など利己的精神を積極肯定する考えへの批判から成り立っているため、総じて公平性・平等性といった価値観に重きを置いていると言える。その点のみを採り上げて見れば、社会主義と宗教とは近似性があるとも言えるのであるが、高木顕明は自身の信条を社会主義である述べながら、それを思想としての社会主義と同一視する立場を取らなかった。この点は大いに注目すべきである。

この論考において彼は、あくまで信仰実践とはいかにあるべきか、ということを問う姿勢を貫いている。それ故に、『平民新聞』が掲げる思想や運動としての社会主義（社会制度の改変を第一目標とし、自己を問う、という視

点を欠いたもの)ではなく、信仰を個人の問題に限定する(社会へのはたらきかけを問わない)、トルストイの立場でもない、自己と社会との関係性を問うあり方を模索しているのである。

『余が社会主義』の基本的性格

それでは、『余が社会主義』の内容を確認していこう。

序論として、彼の主張する社会主義とはどのようなものかということについて、二つの定義が建てられている。まず一つは、

社会主義とは議論ではないと思う。一種の実践法である。

というものである。ここでいう議論とは、あるべき政体、統治機構あるいは社会制度を実践に先立って理論的に構築することであると言える。したがって、そこでの社会制度像は固定的で静的なものとならざるを得ない。このことを高木顕明は「予言」と表現している。

一方で、実践法とは、社会制度を漸次に改良していく事を意味している。故に性質として、そこでの社会制度像は未来的で動的なものと見ることができ。論考の中では、この性格をもって「第一着手」と表現している。

つまり、第一の定義で示されているのは、

現象の社会制度を下シタ々改良して社会の組織を根本的に一変せねば成らんと考へて居る。

と述べられるように、社会制度の根本的変革、それ自体を目標とするのではなく、能力の及ぶ限り社会改良していった、その結果として社会の組織が一変することを期する、ということである。

二つ目の定義は、

余は社会主義は政治より宗教に関係が深いと考へる。

というものである。これは、政治議論が、具体的に社会や諸個人間の関係性（つまり自己の外部のもの）をまず変革することを企図するものに対して、宗教は、第一義的には、個人の内面をまず変革することを目指すものである、ということである。ただし、トルストイの『非戦論』（社会制度の変革よりも、人々が信仰を持つことを主張する立場）とは一線を画す、と定義されているので、ここでいう宗教とは、内心の問題のみをいうのではなく、必ず実践としての社会変革がともなうものと理解されている点に注意したい。つまるところこれは、内なる社会性の獲得ということであると言える。

ここで高木顕明が、

社会の改良ハ先づ心零上より進みたいと思ふ。

と宣言するのは、内面の変革が先立たなければ、社会の改良もそれ自体が自己目的化し、社会的なコンセンサスが伴わなくとも制度さえ改良してしまえばよいという、いわば還元主義的、もしくは原理主義的な態度に陥る危険性があるためと考えられる。これは対外的な意味で衝突を惹起するだけでなく、エリート主義的に他者を啓蒙しようとするのであるから、浄土教信仰にとって最も根本的立場である凡夫の自覚が見失われてしまう、という点で、宗

教的な意味でも障碍をもたらず姿勢であると云える。ともあれ、こうした高木顕明の立場は、下部構造よりも上部構造に重きを置いている点で、共産主義とも決定的に異なる態度であることが分かる。

序論における二つの定義から明らかな通り、ここでの社会主義とは、言葉こそ論壇の時流に影響されているものの、一般的に定義されるところのそれとは根本的に異なる性格を持っている。あくまで、自己と社会との関わりということに第一の価値を置く、という点のみをもって、この信条が「社会主義」と名付けられているにすぎないのである。

そして、その信条の性格に即して言えば、自己と、自己を取り巻く社会が、相互に、批判的に関わることで、同時的に変革していく（ただし以下の論で示される通り、論理的には、自己の思想回転が実務行為に先立つ）こと、その有様を高木顕明は社会主義と呼んでいるとみられるのである。

『余が社会主義』における信仰の対象

前節で見てきた様に、『余が社会主義』では二つの定義によって全体を規定した後、続いて高木顕明自身が社会主義と呼称する信条についてを、

余は社会主義を二段に分類してお話し致します。第一を信仰の対象と云ひ第二を信仰の内容と云ふ。其の第一の信仰の対象と云ふ内を更ニ三段に分類致します。云ク一ツニ教義、ニツニ人師、三ツニ社会。次ニ第二ノ信

仰の内容も又更ニ二段に分類致します。云ク一ツニ思想回転、二ツニ実務行為である。

と述べて、内容を分類・整理し、体系化を試みている。本論では、彼の論理構成に随い、内容を検討していきたい。高木顕明は、先の定義において自身の社会主義を宗教実践と捉えているのであるから、その内容を論理的に明らかにしようとする場合、第一に示されるべきは信仰の対象であるといえる。それについて『余が社会主義』では、教義・人師・社会と明らかにしている。

この内容を本文の表現を借りつつ整理すると、

教義 … 阿弥陀仏 … 「平等の救済や平等の幸福や平和や安慰」

人師 … 釈尊・親鸞 … 「心零界の平等生活を成したる社会主義者」

社会 … 極楽 … 「眞ニ極楽土とは社会主義が実行せられてある」

という三つが、信仰の対象であるというのである。

このような分類の形式は、仏教における三帰依（仏・法・僧への帰依）を、浄土教的に、かつ現代的に読み替えたものといえる。仏・法・僧に準じた順でないのは、浄土教は教主である阿弥陀仏を、教主である釈尊よりもより根源的と見るためであろうか。

ところで、この三帰依を貫くものとは一体何であろうか。換言すれば、どのようにして信仰の対象をこの三つに見定め得たのか。これはおそらく『余が社会主義』の中でも繰り返し表現される様に、平等の原理ということに有ろうかと思う。ただし、ここで言う平等とは、

絶対的平等の保護である。智者にも学者にも官吏にも富家にも安慰を与へつゝあるが、弥陀の目的は主として平民である。

と、もっとも救われざる者をこそ救いの真の対象とするような平等である事が示されているのである。つまり、一切を平均化するような平等ではなく、如来の目から見た、絶対的平等とも言うべき視点に立脚しているのである。それは阿弥陀の本願の根本精神が、一切衆生の撰取不捨といいつつ、悪人を正機とするような絶対的平等性をもったものであることの表現であると言える。

もちろんこうした配当は、釈尊を人師であるとする点や、極楽浄土を此岸的に捉えている点など、表面的には親鸞の教義に合致しない点が見られるが、むしろここに彼一流の実践的な教学の解釈があると言えるのであって、一概にその点を以てこの論考自体の論旨、ならびに価値について、否定的に捉えられるべきではないと思われる。なぜなら、我々が学ぶべきは、こうした高木顕明の実践的解釈がもつ方向性であろうからである。

思想回転と実務行為

『余が社会主義』では、信仰の対象を見定めた後、続いてその内容についても二つに定義している。その一つは思想回転であり、もう一つは実務行為であるというのである。両者はいわば、内心の変革と、その具体的表現といふことであるから、この二つを信仰内容と見定めることは当然とも言えるが、問題はここで、両者がどのような関

係性をもって自身に成立するものと捉えられているか、ということである。

高木顕明の信条は真宗の教えに基づくのであるから、こうした信仰内容の理解の背景には、おそらく本願成就文の内容が念頭に置かれていると考えられる。内容を配当して考えると、信心歡喜（＝思想回轉）と願生淨土（＝実務行為）の成立を以て信仰の内容としている、ということである。

そのような理解の前提として、親鸞における本願成就文の領解がどのようなものであったか確認しておきたい。他力真宗という信仰のあり方の具体的な内容は、専修本願念仏による阿弥陀仏の淨土への往生であるといえる。そして、我々を淨土へと往生せしめるのは、自力作善による功德の積み重ねと回向ではなく、他力のはたらきである。その他力について親鸞は「行巻」に、如来の本願力であると押さえている。したがって、他力救済の力用の本源は、法蔵菩薩因位の時において一切衆生を撰取し救いとらんと建てられた、本願である。

であるならば、その本願が成就する、ということこそ、我々にとっての救いの成立地点であると同時に、信仰生活の出発点であると言える。その本願の成就文には、

諸有衆生、聞其名號、信心歡喜、乃至一念。至心迴向。願生彼國、即得往生、住不退轉。唯除五逆、誹謗正法。⁸⁾
とある。親鸞はこの本願成就文を読み下すにあたり、特異な訓を施している。それは、

本願成就の文『經』に言わく、諸有衆生、その名号を聞きて、信心歡喜せんこと、乃至一念せん。至心に回向せしめたまえり。かの國に生まれんと願すれば、すなわち往生を得、不退轉に住せん。ただ五逆と誹謗正法とをば除く、と。已上⁹⁾

というように、一般的な読みでは全体を一文として読むところの内容を、「諸有衆生、その名号を聞きて、信心歡喜せんこと、乃至一念せん。」と区切ったのである。その上で以下の文に「至心に回向せしめたまえり。」と敬語表現を施している。こうした読みによって、回向の主体を如来に帰せしめて、その他力性を明らかにしていると同時に、「名号を聞きて、信心歡喜せん」という行信が具体的に成立する有様を「乃至一念」と押さえたのであった。

したがって、我々の現在に本願成就の一念として生起・成立する、その事態の内容は、「信心歡喜」を背景として、「願生浄土」を展望することである、と理解することができよう。こうした内容を、現代的に、且つ具体的に表現し直したのが、高木顕明が規定するところの、思想回轉と実務行為ということではないかと考えられるのである。

では『余が社会主義』文中において、思想回轉や実務行為についてどのように述べているのだろうか。実は、本文中においては両者について、思弁的な定義をすることは為されていない。むしろ当時の社会が抱える具体的な問題に即してその内容が明らかにされている点に特色があるのである。

ではまず、思想回轉についての表現を見てみると、

富者や官師は此を翫弄物視し是を迫害し此を苦役して自ら快として居るではないか。外界の刺激が斯の如き故に主観上の機能も相互ニ野心で満ち々々居るのである。実に濁世である。

という、自己と社会の有様を述べ、それに対して、

尔るに御佛は我等を護るぞよ救うぞよ力になるぞよと呼びつゝある。

と述べるのである。つまり、社会環境と自己に関しての洞察、すなわち時機の自覚と、それに対する救済の法が示されている、ということである。これは、真宗学のテクニカルチームに即して言えば、機法二種深信の問題と言えるだろう。ここでは、そのことを以て「思想の回転」と位置づけている。なぜなら、我々が拠って立つところが、濁世の論理でなく浄土の論理へと、思想的に転回することを示しているからである。

次に実務行為については、

我々は此の様な大勲位とか將軍とか華族とかと云ふ者に成りたいと云ふ望みはない。此の様な者になると働くのではない唯だ余の大活力と人労働とを以て実行せんとするものは向上進歩である。共同生活である。生産の為に労働し、得道の為に修養するのである。

と述べて、労働と修養を内容とする共同生活であるとしている。それは立身出世を目指す野心の成就ではなく、人生の質的な向上進歩を志すが故である。そして、

生存競争の念を離れ共同生活の為に奮励せよ。

と、重ねて主張するのである。

ここで主張されているのは、我々にとって、本来あるべき世界、そして目指すべき世界とは、共同生活が完全且つ円満に成立している場所、即ち浄土である、ということであろう。したがって実務行為とは、願生浄土というこの具現化していく姿、その運動性そのものである。

また、こうした表現から読み取れることは、ここで言う実践行為の原動力は、平民の貴族に対するルサンチマン

ではない、ということである。なぜなら、体制を变革して平民が支配者になることが目的ではないからである。この論考の表現によれば、そのような階級闘争は、差別がある社会に対する真の批判にならない、いわば生存競争にすぎないのであるから、この念を離れて、思想の回転によって得られた絶対的平等の視点を具現化すべく、共同生活に励むことこそ、本当の意味で宗教的な実践であるとするのである。

以上のように、思想回転と実務行為という二つの信仰内容の見定めから鑑みるに、高木顕明の言う社会主義とは、勝手に構築した論理・信条ではなく、確かな真宗の教的理解と信仰に基づいている事が分かるのである。

高木顕明の戦時教学批判

『余が社会主義』は、高木顕明の信仰実践についての理解を述べたものであるが、その述作の直接の動機は、彼の日露戦争に対する反対の姿勢があり、宗学者が戦争遂行のために親鸞の言葉を援用することへの批判を表現する為であった。

そのため、この論考の結びにかえて、

終りに臨んで或人が開戦論の証文之様ニ引証して居る親鸞聖人の手紙之文を抜出して、此の書が開戦を意味せるか、平和の福音なるかは宜しく読者諸君の御指揮を仰ぐ事とせん。

と述べて、戦時の教化活動において、頻繁に用いられていた、七月九日付、性信坊宛の「御消息」の表現を提示し

ている。

さればとて念佛をとゞどめられさふらひしが、世にくせごとのをこりさふらひしかば、それにつけても、念佛をふかくたのみて、よくいのりに、こゝろにいられて、まふしあはせたまふべしとぞおほへさふらふ。(中略) 詮じさふらふところは、御身にかぎらず、念佛まふさん人々は、わが御身の料はおほしめさずとも、朝家の御ため國民のために、念佛をまふしあはせたまひさふらはゞ、めでたふさふらふべし。往生を不定におほしめさん人は、まつわが身の往生をおほしめして、御念佛さふらふべし。わが身の往生を一定とおほしめさん人は、佛の御恩をおほしめさんに、御報恩のために御念佛こゝろにいられてまふして、世のなか安穩なれ、佛法ひろまれとおほしめすべしとぞ、おほへさふらふ。よくく御案さふらふべし。^⑩

この消息の内容は、日露戦争当時のみならず、第二次大戦後においても、親鸞に護国思想があったのか、否か、という論争を巻き起こすものであった。いまここで、この消息の内容を検討する紙幅もないのであるが、

親鸞聖人の政治に対する態度というものは、これは決してたんなる反権力ではない。しかし権力迎合でもない。その意味でして名づけるならば、やはり非権力と呼ぶべきなんじゃないか。^⑪

という指摘の通り、この消息における親鸞の姿勢は、単純な護国思想ではないであろう。同時に、親鸞がアナーキストではないことも読み取ることができる。ともあれ、仮にこの文章が親鸞の護国思想を述べたものであるとしても、それがそのまま戦争の遂行を動機づけるものでないことは一目瞭然である。

逆に問題となるのは、この文は、高木顕明が言うように、「平和の教示」を示したものでのだろうか、というこ

とである。この消息の内容は、どのような立場の人（我が身を差し置いても国のために念仏する人、往生不定の人、往生一定の人）も、いずれも念仏せよ、というように、総じて念仏に帰せしめるものである。それ故に、「平和の教示」を内容とするかは、文面からは読み取ることができない。

しかし、だからこそ、念仏の精神が、戦争を肯定するものであるのか、平和を希求するものであるのか、真宗者の念仏理解が問われる問題である、と高木顕明は問いかけるのである。

おわりに

以上のように、高木顕明の『余が社会主義』という論文を検討してきたが、結論として、タイトルから想起されるような、政治信条を開陳した論ではなく、あくまで自身の信仰の体系を、当時の社会的課題を具体例として挙げつつ、明らかにしたものであると言える。

ただし、高木顕明の行実を鑑みるに、幸徳秋水に共鳴し、大石誠之助ら社会主義者と親交を持つなど、政治思想としての社会主義との関係も深い。それは、立場こそ異なれど、部落差別問題や廃娼運動、日露戦争反対など、具体的個別的问题に関して連帯して運動したということなのか、『余が社会主義』で主張するような差異が本当にあつたのか、今後の研究を要する課題である。

ともあれ、この論考は、我々において、真宗における信仰実践・社会実践とはどのようにあるべきなのかを考え

る上で、大きな示唆を与えるものである。高木顕明が自らの信条を「社会主義」と呼称した、その意味において、真宗者はすべからず社会主義者たらざるをえないのではないだろうか。

註

- (1) 『真宗聖教全書』二 宗祖部 七七六頁
- (2) 『定本親鸞聖人全集』第三卷 和文・書簡篇 一四四頁
- (3) 籀行信「親鸞の還相回向觀—願文の訓点を手掛かりにして—」(『真宗教学研究』第十八号 五五頁)
- (4) 真宗大谷派遠松山浄泉寺HP <http://www1.ocn.ne.jp/~jyosenji/index.html>
- (5) 大東仁『真宗僧侶と大逆事件 大逆の僧 高木顕明の真実』風媒社 二〇一一年 参照
- (6) 林茂・西田長寿編『平民新聞論説集』岩波書店 一九六一年 参照
- (7) 『広辞苑』第五版 岩波書店 参照
- (8) 『真宗聖教全書』二 宗祖部 二四頁
- (9) 『定本親鸞聖人全集』第一卷 教行信証 九七・九八頁 原漢文
- (10) 『定本親鸞聖人全集』第三卷 和文・書簡篇 一二八・一二九頁
- (11) 久木幸男『社会を見る眼 —親鸞をとおして—』同朋選書 九 東本願寺 一九八一 四四頁

凡例

- ・『余が社会主義』本文については、菱木政晴著『極楽の人数』(白澤社 二〇一二年)巻末に掲載されたものを底本として用いた。
- ・漢文の振り仮名、左訓等は省略した。
- ・引用文の一部は、読み下しにし、常用漢字・現代仮名遣いにあらためた。
- ・敬称は略す。

〈キーワード〉高木顕明 『余が社会主義』 大逆事件 浄土真宗